



特別収録

私の日本語作文指導法



現場の日本語教師の体験手記 私の日本語作文指導法

第11回(2015年)から現在までの「中国人の日本語作文コンクール」HPもしくは
は受賞作品集に掲載された体験手記の一覧を掲載しています。 ※教師名は敬称略

	教師	所属	タイトル
第11回 (2015)	宮山昌治	同済大学	〈面白み〉のある作文を
	木村憲史	重慶大学	作文と論文のはざま
	寺田昌代	対外経済貿易大学	時間が無い!
	入江雅之	広東省東莞市理工学院	わたしの作文指導
	河崎みゆき	上海交通大学	「私」でなければ書けないことを大切に
	堀川英嗣	山西大学	書いたものには責任を持つ
	照屋慶子	嘉興学院	学生と私の感想
	松下和幸	北京科技大学	思いや考えを表現する手段を身につけさせる作文指導
	松下和幸	北京科技大学	中国人学習者の生の声よ、届け!
	劉 敬者	河北師範大学	パソコンで作成した学生の文章指導体験
	金澤正大	元西南交通大学	作文指導の基本
	若林一弘	四川理工学院	短期集中マンツーマン講座
	大内規行	元南京信息工程大学	「書いてよかった」と達成感が得られる作文を
	雨宮雄一	北京第二外国语学院	より良い作文指導を目指して
閻 萍	大連理工大学城市学院	力をつける作文指導法	
半場憲二	武昌理工学院	私の日本語作文指導法	
第12回 (2016)	藤田炎二	山東政法学院	この難しい作文をどう書くか
	半場憲二	武昌理工学院	私の日本語作文指導法(2)
	池嶋多津江	同済大学	書くことは「考える」こと
第13回 (2017)	瀬口 誠	運城学院	【特別寄稿】審査員のあとがき
	瀬口 誠	湖南大学	【特別寄稿】審査員のあとがき
	郭 麗宇	上海理工大学	オリジナリティのある面白い作文を目指して
	賈 臨宇	浙江工商大学	文中での出会い
	中村紀子	中南财经政法大学	感動はここからはじまる～授業外活動からの作文指導アプローチ～
	高良和麻	河北工業大学	読みたくなる作文とは
	張科 蕾	青島大学	日本語作文に辞書を活用しよう
第14回 (2018)	濱田亮輔	東北大学	私の日本語作文指導法
	半場憲二	武昌理工学院	作文指導で生じている三つの問題点——私の日本語作文指導法(3)
	田中哲治	大連海事大学	私の作文指導の実践紹介
	古田島和美	常州大学	作文指導を通して思うこと——中国人学生の体験や思いを日本人に届けたい——
第15回 (2019)	徐 秋平	西南民族大学	作文指導とともに成長を遂げて
	半場憲二	広東外語外贸大学南国商学院	国際化と個の時代重要性を増す作文指導——私の日本語作文指導法(4)
	高柳義美	元日本語教師	大連通い
第16回 (2020)	伏見博美	広東東軟学院	中国で暮らして感じたこと
	小椋 学	南京郵電大学外国語学院	写真を撮るように作文を書く—作文を書くヒント—
	郭 献尹	淮陰師範学院	忘れたい貴重な作文の指導経験
	丸山雅美	福州外語外貿学院	日本語作文が書けるようになるまでのプロセス
	半場憲二	四川大学錦江学院	誤用訂正・回避の指導力——私の日本語作文指導法(5)
第17回 (2021)	川内浩一	大連外国語大学日本語学院	作文コンクールに応募しようと思っている学生のみなさんへ
	小椋 学	南京郵電大学外国語学院	読者を意識して書く—作文を書くコツ—
	金戸幸子	大連外国語大学	私の日本語作文指導法—私の指導方針と学生のみなさんに伝えたいこと—

読者を意識して書く

— 作文を書くコツ —

南京郵電大学外国語学院 小椋学

作文が苦手な学生向けに書いた「写真を撮るように作文を書く—作文を書くヒント—」は、第十六回受賞作品集に掲載された。私の過去の経験から写真と作文には共通点が多いことを紹介し、「良い写真を撮るために注意すること」と、「良い作文を書くために注意すること」を比較しながら、作文を書くにはどうしたらよいか読者に考えてもらいたいという思いで書いた。この文章は二〇二〇年九月二十三日の日本僑報社プレスリリースでも取り上げられ、これまでにないユニークな視点で、とても役に立ったと評判だった。

今回は昨年の続編として、「中国人の日本語作文コンクール」にターゲットを絞り、私が南京郵電大学で指導した経験をもとに、作文のテーマの選定から応募に至る

まで、応募者に注意してもらいたいことを一通り紹介することにしました。

まず、応募者が知らなくてはいけないことは「中国人の日本語作文コンクール」と他の作文コンクールとの違いである。「中国人の日本語作文コンクール」は佳作賞を除く入賞作品が全て作品集として取りまとめられ、日本で販売される。この点が最大の違いである。そのため、応募者は、日本人がお金を払ってでも読みたいと思うような原稿を書かなくてはならない。また、その受賞作品集の制作に携わっている人たちに「これはぜひ日本人に読んでもらいたい」と思ってもらえる原稿であり、「この文章を読んで良かったなあ」と思ってもらえるものではない。日本語の試験のように、指定された文字数を満たしたことを書き、共感してもらえないものにはなければならぬ。日本語の試験のように、指定された文字数を満たし、語彙や文法が適切に使われていれば高評価を得られるわけではないのである。

次に、応募者がしなくてはならないことは作文のテーマの確認である。今年のテーマは三つある。「①私はこう考える!」ポストコロナの日中交流、「②伝えたい!

『新しい交流様式』の実践レポート」、「③アイデア光る！私の先生の教え方」である。テーマの趣旨は「中国人の日本語作文コンクール」特設ページに掲載されているので、よく読んで主催者がどんな作文を書いて欲しいと思っているのか考えてもらいたい。この三つのテーマのうち、一番イメージしにくいのが②の「新しい交流様式の実践レポート」であるが、過去の作品集からこのテーマに近い作文を探して読めば、どんな作文を書いたらよいかイメージしやすくなるだろう。第十六回受賞作品集には、昨年二等賞を受賞した寧波工程学院の屠洪超さんの作品「コロナ時代の友情」や三等賞を受賞した南京農業大学の劉偉婷さんの作品「『そして一緒に乗り越える』クラウドハグをしよう」などが掲載されている。これらの作文を読んで自分が作文を書く時に参考にしてもらいたい。

その次に、応募者がしなくてはならないことは、題材探しである。作文は内容が一番重要である。そこで、どうしても読者に伝えたい、知ってもらいたいと思う自分の経験を探さなければならぬが、良い題材さえ見つければ、推敲次第で作文はどんどんよくなるので、入賞の

田舎で一人で住んでいるおばあちゃんに WeChat のビデオ通話のやり方を教えに行つて、後日おばあちゃんとビデオ通話ができるようになったことを書き、胡洋さんはアイドルのライブで知り合った中国人の友達と再会できずにいたが、ゲームをしたり、オンラインライブを一緒にしながら交流を続けていることを書いた。中国人にとってはごく普通のことであっても、日本人にとっては中国人の生活を知る機会になり、読んでよかったと思ってもらえるのである。また、題材の選び方として、多くの人が書きそうな題材を避けて、他の人が書かなそうな題材を選ぶ方法もある。他の人と同じような題材の場合、作文の内容が似てしまい、印象に残りにくくなってしまふからである。今回は中国全土から三千百九十六名が応募し、その中で佳作賞以上の入賞者は二百八十名、作品集に掲載されているのは六十一名の原稿である。これだけ多くの原稿を読んだ後でも、あの原稿は良かったと思つてもらえるように題材選びを慎重に進めなければならぬ。

題材が決まったら、いよいよ書き始めよう。長い文章を書くのに慣れていない学生は、大きく三つの部分に分

可能性も高くなる。逆に良い題材が見つからなければ、いくら完璧な日本語で書いても選ばれる作品にはならない。だからこそ、作文を書く上で題材選びは最も重要なのである。日本語が得意でも良い題材が見つからなければ入賞することはできない。反対に、日本語が苦手な学生であっても良い題材があれば、本人の努力次第で入賞する可能性は十分ある。私は過去に日本語が苦手な学生を指導し、その学生の作文が入賞したことが何度かあった。入賞すればその学生は自信がつくし、日本語学習のモチベーションも上がるので、成績の良し悪しに関わらず平等に指導するように心掛けていく。もし、良い題材はあるが、日本語が苦手という人がいたら、早めに文章を書いて先生に読んでもらい、指導してもらえようように頼み込んでみることをお勧めしたい。必死になって考えて、苦労しながら何度も推敲して書き上げた文章は、読者にもその熱意が伝わるので、あきらめずに最後まで書いてもらいたい。なお、題材を選ぶ時、日本人との交流など日本と関係がある経験に限定する必要はない。今回南京郵電大学は六名の学生が入賞したが、そのうちの二名の作文は日本とは全く関係がない内容である。蒋卓さんは

けて書くことをお勧めする。それは、作文の構成を「①ある日の出来事（八百字程度）、②その出来事から気づいたことや自分の意見など（五百字程度）、③まとめ（自分の希望や目標など）（三百字程度）」に分けて書くことである。そして、まず「①ある日の出来事（八百字程度）」の部分だけ書いてみよう。八百字なら頑張ればなんとか書けるだろう。この①の文章は、読者がその時の様子を想像できるように、できるだけ詳しく具体的に書いて欲しい。書いたあとは何度か推敲する。①の文章が完成したら、②と③の文章も書いてみよう。この順番で書くと、効率良く作文を完成させることができる。南京郵電大学の二年生は一週目に①を書いて、二週目に②と③を追加して千六百字の文章を書いた。③の文章は最後に自分が言いたいことを書くが、学生が書いた作文を見ると③がしっかり書いていない人が圧倒的に多い。①と②はよく書いていても、最後に力尽きてしまい、結論がないまま終わってしまう。作文の最後の部分は、作文の中で最も重要な部分である。作文をどのように締めくくるかによって、作文の評価も変わってくる。だからこそ、自分の気持ちがいかに伝わるように書いて欲しい。

もし、何を書いたらよいか分からなければ、過去の作品集を読んで参考にしたり、先生に相談するのがいいだろう。最後の一文まで気を抜かずにしっかり書こう。そして、何度も読んで推敲が終わったら応募しよう。

今回は「中国人の日本語作文コンクール」に応募する学生向けに、作文を書くコツを紹介した。重要なのは何と言っても題材選びであり、日本人の読者を意識して書くことである。なお、ここで述べた内容は他の作文コンクールには当てはまらないものもあるので、その点には注意してもらいたい。

最後に、この文章を読んで作文を書いた学生が入賞し、その作文を私が読む日が来るのを楽しみにしている。



小椋学（おぐらまなぶ）

南京郵電大学外国語学院日本語科講師。中国の北京語言大学と韓国の高麗大学での語学留学経験を生かし、楽しくて学習効果の高い日本語授業を目指している。中国人の学生に合った教材作りにも関心があり、オリジナル教材の『学覇日語』は口語編、写作編、演講与辯論編がある。また、南京の観光地を日本語で紹介したガイドブック『私が薦める南京の観光地』の作成や大学の講演など、日中交流に向けた取り組みも積極的に行っている。日本語教師歴六年。

私の日本語作文指導法

——私の指導方針と学生の
みなさんに伝えたいこと——

大連外国語大学 金戸幸子

はじめに

私は二〇一八年より大連外国語大学で「写作」を担当しています。大連外国語大学では、日本人教員が担当する「写作」のカリキュラムは、主に二年生後期と三年生前期に割り当てられています。また、二〇一九年度からは選択科目「学术写作」（アカデミック・ライティング）の授業を開講し、主に日本への留学を考えている学生を対象に作文の指導をしています。

私の作文指導法の特徴

私の作文の授業では、主に次の三つの方法で指導にあ

たっています。

一、学生のよくある誤用や不自然な表現の事例を集めて解説

作文指導では、まず、学生一人一人の作文を添削し終えた段階で、学生が実際に書いた作文から誤用や不適切な表現の事例を収集し、クラスで指導していくようにしています。

学生の作文指導でとりわけ目立つのは、（一）話し言葉から書き言葉への転換や「敬体」と「常体」の使い分け、（二）接続詞の使い方、（三）助詞の使い方、（四）時制の捉え方、（五）定型表現（例えば、「なぜなら、〜（だ）」）が十分に身に付いていないことです。このほかにも、母語干渉の影響（よくあるのが「理解」を「了解」、「理由」を「原因」と表現してしまうこと）、日本の漢字ではなく簡体字で書いてくることや、書式（読点の打ち方など基礎的な表記法）がしっかり身に付いていない点も目立ちます。

これらの点については、一人一人の作文添削の際にも丁寧に指導はしますが、最初からあまり詳しく添削を入

れると、学生自身がなぜ間違ったのかを自分で考えることをしなくなります。そこで、作文添削の段階では、修正した理由を書くのは最小限にとどめ、あとは、「呼称表現」は黄色、「文体」はブルー、「口語使用」は緑といったように、間違いに応じた色で示して返却するようにし、授業の場でなぜ誤りなのかを詳しく解説するようにしています。

二、一人一人の作文をスクリーンに映し出して個別に解説
作文指導のなかでも、とくに「学術写作」については、受講生が毎学期約十五名前後です。そのため、一人一人の作文を添削した後に授業でフィードバックを行います。ここでは、授業で一人一人の作文をスライドで映し出し、クラスメートからもコメントを出してもらいながら指導していきます。それを通じて、より洗練された作文の構成や形式、スタイルなどを身に付けさせるようにしています。

個別の作文指導において、日本語の文法や表現の誤りに上に目立つのは、読点の打ち方や改行の仕方といった点がなかなかしつかり身に付いていないことです。しか

も、これは中上級から上級前半レベルの学生たちにも意外に多く見られます。そこで、この方法は、接続詞の使い方、定型表現、表記法を習得させる上でもとりわけ有効だと感じています。

最初は、自分の作文をクラスメートに見られることを恥ずかしく思ったり、抵抗を感じる学生もいるようですが、他のクラスメートが書いた作文を見ることによって、作文の構成の仕方や、話題の組み立て方といったコツも身に付けられるようになるため、学生からも学期が終わる頃には「とても学ぶところが多かった」との評価を得ています。

この指導法がひとつ功を奏し、私の指導のもとで数々の作文コンクールで入賞する学生も多数出ていますし、「第十七回中国人の日本語作文コンクール」では、王子琳さんが三等賞、陳怡君さん、舒文俊さん、王萌さん、袁琦さんが佳作賞を受賞することができました。

三、オンライン授業ではカメラをONにさせている

なお、今はコロナ禍にあり、オンラインで授業を行っている先生も少なくないと思いますが、オンライン授業

では、学生たちには極力カメラをONにさせるようにしています。

作文を書いていくプロセスは、まさに先生との協働作業です。そのためには、学生との対話を進めていきながらお互いに信頼を築いていくことが大切です。教師と学生がキャッチボールしあえる環境を作ること、作文のアイデアも磨かれていくものと考えています。

学生へのアドバイス——「いい作文」の書き方のコツ

さて、普段作文を指導していて、よく学生から、「なかなかいい作文が書けない」という悩みを聞きますが、そのような相談を受けた時、私が学生に伝えていることをここで三つ紹介したいと思います。

一、思いついたことを箇条書きでもいいからメモしよう。最初から大きいことを書こうとしないようにしよう。

作文に限った話ではないかもしれませんが、最初から立派なものを書こうとするとなかなか筆が進まないもの

です。かくいう私自身も、いつもそれに悩まされています。しかし、ブログやSNSでメッセージを書く感じで、そのテーマについて思っていることを最初はとりあえず気軽に書いてみましょう。その際、頭の中で思い描いていることをキーワードレベルで書き出していく「マインドマップ法」も有効です。そうして、関連するところはつなげたりまとめたり、肉付けしていけば、知らず知らずのうちに形になってきます。

二、自分でなければ書けないことを大切にし、自分の言葉で書こう。

作文を書くプロセスは、まさに自分を見つめ直し、表現する作業でもあります。そのため、どこかで見たことのあるような内容だと見る人の印象に残りません。コンクールで入賞できるレベルの作文にするためには、読む人が読んでいて楽しくなるような作文でなければなりません。そのためには、そのテーマについて、いかに自分の体験と結び付けられるかが大事です。そこで、まずはそのテーマに関し、自分が経験したことや思い出し、それを事例として盛り込んでみましょう。そうすれば、必

ず読む人の心を打つ印象に残る作文になるはずですが、
そして、それらを美辞麗句や抽象的な表現ではなく、
自分の言葉で表現することが大事です。どこかから借り
てきたような、自分のものになっていない表現はすぐに
見抜かれてしまいます。私の指導のもとで作文コンクー
ルに入賞した学生たちをみてみると、みな自分ならではの
エピソードを自分の言葉で誠実にしっかりと語ること
ができていた人たちです。

三、冗長な文章は書かないようにしよう。

一方、文章を具体的に書くことはもちろん大事ですが、
冗長な文章を書かないようにすることも必要です。学生
の作文を指導していると、よく書いているにもかかわらず
ず、書きたいことがたくさんあって、指定字数をかなり
オーバーしてしまい、減点される人がいます。そうする
と、せっかくいい作文を書けていても評価が半減してし
まいます。そこで、私が授業でよく実践しているのは、
「二百字作文」や「四百字作文」です。

指定された字数に収めようとすれば、何度も読み返し
て同じような表現を削り、ダイエツトさせていくことに

なりますが、これは固い書き言葉や論文で要求される簡
潔な文章表現の仕方（例えば「なぜ事件が起こったの
か」↓「事故の原因」というような名詞化させた表現方
法）を身に付ける上でも役立ちます。

おわりに

以上、私の作文指導法と学生にしばしばアドバイスし
ていることを書いてきましたが、作文は文章のセンスの
問題でもあります。言いたいことは同じでも、「見せ方」
つまり表現の仕方によって読み手に与えるインパクトは
変わります。

たとえば、スピーチは、「原稿を書く」という点まで
は作文と同じですが、スピーチはジェスチャーなど非言
語情報も重要な要素になる反面、作文は言語情報がすべ
てになります。したがって、作文を書く時は、言語表現
によるセンスがとりわけ重要になります。私が指導して
いる学生には大学院への進学を志望する学生も少なくあ
りませんが、その「考える」プロセスを通じて作文のセ
ンスを磨いていくことは、自分自身を成長させることに

繋がりが、希望する進路の実現にもきつと役に立つことと
しよう。



金戸 幸子（かねと さちこ）

慶応義塾大学法学部卒、東京大学
大学院総合文化研究科国際社会科
学専攻修士課程修了、同博士課程
単位修得。日本の大学教員として
留学生教育、台湾での日本語教師
経験等を経て、二〇一八年より大

連外国語大学で日本語のスピーチ・作文指導や日本研究関連
の授業を担当。中国語法廷通訳人等として中日通訳翻訳もこ
なす。日本語教師歴五年。